

## ヴァイキングの勇気秘密は 死後の豚肉天国

八世紀から十一世紀にかけてのノルマン人は、すぐれた航海術とケタ外れの勇氣によつて、ヨーロッパの諸国民から「ヴァイキング」として恐れられた。が、この呼称は、もちろん被害者の側から見たもので、彼ら自身は、「海の勇士」と呼び、その勇氣の物語である北方民話の「サガ」とともに、いまでもスカンジナビア諸国民の心の支えとなっている。

ノルマン人、または、ディーン人の異名を持つこの北方ゲルマン族は、その風土が生存にとつてきわめて過酷であつたこともあつて、八世紀ごろから海外雄飛に乗り出し、西ヨーロッパの沿岸はもとより、地中海から東はカスピ海、黒海にまで進出、地中海ではシシリー島に侵入してシシリー王国を建設したあと、北上してロシアにノヴゴロドやキエフ公国を建て、さらにスラブ人の間に混入してロシアを建設した。

手近な例としては、フランスのパリから西北西に当たる地方はいまでもノルマンジーと呼ばれているが、これは九世紀にノルマン人がこの地方に侵入したため、当時のフランス王が王女を嫁がせ、この地にノルマンジー公国の建設を許した名残である。さらに勢いに乗つたノルマン人たちは、海洋を西に進んで八六〇年にアイスランドを発見、西



曆一〇〇〇年ごろにはグリーンランドを経て北アメリカの北東岸に達していたことがほとんど確認されている。これは、コロンブスのアメリカ発見に先立つ五百年も昔のことである。ノルマン人たちが航海に用いた船は、こんにちから見ればもちろんお粗末そのもの、それこそ決死の覚悟がなければとてもあの北海の荒海に乗り出せるようなものではなかった。が、あえて彼らにその決死の覚悟を促したもののこそ、実は何ともほほえましい天国への信仰だったのである。

すなわち彼らは、勇敢なる戦死者は、死後天国に行き、セリムニルと呼ばれる豚のローストを腹いっぱい食べられると信じていた。

しかも、この豚は、勇敢なる戦死者たちがいかに腹いっぱい食べても、翌日になるとまたもと通りのローストになるので、未来永劫、このローストの尽きることはないといひ伝えられていた。

ヴァイキングたちは、この信仰を胸に、鉛のような空の彼方に天国を夢見ながら必死に櫓をこいだ。その胸の高鳴りを想像するとき、目標なき時代に生きるわれわれにも何かが確かに伝わってくるようだ！